

モンゴル語訳『法華経』管見（中）*

樋 口 康 一

6. モンゴル語訳『法華経』の行文

A系列とB系列で異なるのは、前節触れた章数や章立てだけではない。もちろん、既に述べた通り、大部分の行文は一致している。ところが、一部ではあるが、齟齬する個所では大きく異なっており、それを仔細に検討すると、モンゴル語訳『法華経』の成立事情の一端をうかがい知ることができる。

次に掲げるのは、漢訳及びチベット語訳とともに第3章に相当する「譬喩品」の第15頌である¹⁾：

《3-15(a)》

A *kölgen-dür* uduridduyčid-un jarliy-i sonosuyad :

B *angq-a urida* uduridduyčid-un jarliy-i sonosuyad :

(b)

A ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer ilete qubilyaqu ba :

B ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer ilede qubilyaqu ba :

(c)

A ada simnus-a ülü ilaydaqui büged-iyer :

B ada simnus-a ülü ilaydaqui büged-iyer :

(d)

A tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

B tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

「乗り物にのって（初めて）導くもの（=仏）のお言葉を聞いた当座は、この国土に仏が飾りによって変身（して出現）したかもしくは、悪鬼に打ち負かされないことによって、このように私には恐れない力が生まれた（と思い込んでいた）。」

他の個所ではほとんど差異がなく、わずかに正書法上の変異が見られるだけである。それだけに、冒頭の A *kölgen-dür* : B *angq-a urida* の対比は印象的である。前者は、「乗り物で」、後者は「最初に」であるから、意味の相違は甚だしい。

この齟齬は、チベット語版に照らして初めて説明可能となる。チベット語版の第1句 *thog ma mam par 'den gyi gsung thos nas* で、問題の冒頭にある形式は *thog ma* である。その意味は、"the upper end, origin"²⁾ であるから、Bと平行していることは疑いの余地がない。したがって、Bは少なくとも第1句に関しては翻訳として疑問はない。

では、Aの「乗り物」とは何なのか？問題の *thog ma* をチベット文字で表記すると《ཐོག་མ་》であるが、これと似た形式に *theg pa* 《ཐེག་པ་》があり、こちらの意味は "vehicle"³⁾ なのである。「大乘」や「小乗」の「乗」に当たり、仏典ではよく使われる。ただし、衆生に先んじて「乗」に乗るようでは、大乘仏教とは称せまい。事実、仏の異名としても「乗り物に乗って導く者」を意味する形式は存在しない。明らかな誤訳である。

他のインド系の文字と同じく、分かち書きをしないチベット語の正書法ではここに掲げたような文字群が延々と横に連なる。そこで、筆者のように素養の乏しいものは、よく似た字形や、字の上下につく母音記号を見誤ることがないわけではない。とはいえ、丹念に読めば、あるいは文脈を顧慮するだけでも、この種の取り違えにはすぐに気が付ける。初学者ですらそうなのであるから、

この誤読はきわめてお粗末な類と見なすほかない。

残る部分には、正書法上の相違はあっても、内容には異同がない。ところが、ここには別の問題がある。この一節に対応する羅什訳は「初聞佛所説 心中大驚疑 將非魔非作佛 惱亂我心耶」であり、岩本訳は「この世の指導者である仏の声をはじめて聴き、わたくしの驚きはすさまじかったのです。『悪魔が仏の姿をして、この世に現れて、わたくしを悩ますのであろうか』とさえ思いました。」で、ともに後半部がモンゴル語訳とは大きく相違している。上に掲げた和訳は、やたらに（ ）が多いことが物語る通りで、苦肉の策の産物である。

実は、モンゴル語訳はここでも誤訳しているのである。チベット語訳の第3・4句は 'di bdud rkyal ka byed pa ma yid grang / de ltar bdag ni bag tsha 'i rtobs skyes so で、チベット語訳からの直訳である河口訳では「魔王が悪戯をなせしに非ざるかと思いたりき かくの如く我は因習の力生じたりき」と翻訳されている。これもモンゴル語訳とは甚だしく相違していることは否めない。モンゴル語の行文から推測するに、第3句の rkyal ka 《རྒྱལ་ཀ་》は kyal ka “joke, jest” の別形である⁴⁾が、この複合形式の前半を rgyal 《རྒྱལ་》“victory”と誤読し⁵⁾、第4句では bag tsha 《འགྲུབ་ཅི་ལ་》“to be afraid⁶⁾”の前に存在しない否定辞 mi が見えた（か、もしくは助詞 ni 《ནི་》を mi 《མི་》と取り違えた？）と考える他ないであろう⁷⁾。

本稿第4節で既に述べた通り、Aにはチョスキ・オッセル（Chos kyi 'od zer）の原本をエルデニ・メルゲン・ダイチン・タイジ（Erdeni mergen dayičing tayiji）がシレート・グーシ（Siregetü guusi）の別訳を参照しつつ改訳した旨の記載がある⁸⁾。もし、それが真実であるとすれば、この一節を見る限りでは、言及されている高僧たちのチベット語の力量はたかが知れていることになる。しかし、モンゴル人である他の両名はさておき、チョスキ・オッセルはチベット人である。母語の、それも仏典に頻出する用語を取り違えるこの種の誤訳をすることはあり得ない。また、モンゴル人である二人が、もとの正確な訳文をことさらに誤ったものに改めるとも考えられない。となると、結論は一つしか

ない。奥書の記載は虚偽なのである。この問題については、後ほどあらためて触れる。

Bでも、この種の幼稚な誤りの全部が修正されているわけではないこともこれでわかる。清朝時代の改定がいかなる性格のものであったかが、如実に物語られているのである。これについては、筆者は様々な仏典を材料として、これまで論じてきた。

ただし、一部はまともに翻訳しなおされていることも確かであるし、逆の事例つまりBに誤訳がありそれがAでは改められている例は、皆無である。また、ここでは敢えて触れないが、より改進的な形式が散見する⁹⁾。したがって、成立の時期に関して両者の時間軸上における相対的な位置関係については明瞭であると考えて差し支えない。

そこで問題となるのは、Bはさておき、Aの真の成立年代である。奥書の記載の信憑性が乏しいことは既に明らかとなった。ただし、それは関わったとされている歴史的人物の実際の活動についてである。ところが、仔細に行文を検証すると、原典の製作年代が言及されている人物の活躍した時代ではなかったと断定することも必ずしも容易ではないことも判明するのである。第9章に相当する「授學無學人記品」の冒頭近くに位置する次の散文の一節は、Aの原典の成立時期を特定するにあたって逸することのできない証拠を提供するものである：

A burqan-u ene *bilge bilig-tür* dayan sedkiged : bida бүкүн бер дегер-е үгеи үнекер тоюлуысан боди qutuy-un vivakirid-i olqu boltuyai :

B burqan-u ene *belge bilig-tür* dayan sedkiged : bida бүкүн бер дегер-е үгеи үнекер тоюлуысан bovadhi qutuy-un vivangkirid-i olqu boltuyai :

「仏のこの般若智に思いをめぐらし、『われらすべても無上の真に円満な菩提のしるしを得られればよい。』(と考えて)¹⁰⁾」

Aでは用いられていない外来語表記専用の字母であるガリック文字が使用さ

れていたたり、一部の外来形式の表記法が異なっていたりする点はさておき、最も目を引くのは「般若智、最高の悟り」を意味するA *bilge bilig* : B *belge bilig* の対照である。前者は、もとなつたウイグル語形式そのままの形式で、元朝時代に翻訳されたモンゴル語仏典においてすら例証されることはまれである。複合語の前分の初頭母音が第2音節の母音に同化したBの *belge bilig* がこの時期でさえ優勢であった。もちろん、*bilge bilig* が17世紀以降に使用されることは皆無である。したがって、この形式の存在はAの原典の成立時期が元朝時代である公算が高いことを示すものと考えてよい。

となると、Aはやはり例の奥書の記載通り、チョスキ・オッセルの訳文なのであろうか。ここで有力な示唆を提供するのが、トルファン出土のモンゴル語訳『法華経』写本断片である。

7. トルファン出土モンゴル語訳『法華経』写本断片その1

トルファン出土文書中の『法華経』写本断片は、漢訳では第25章、チベット語訳では第24章に相当する「観世音菩薩普門品」の一節である。元朝時代の同じ手になる2葉の断片の一方（Text 28）はこの品の末尾にあたる部分で、そこには『法華経』の第25章である旨記されている（図1、原寸は21.9×15.2cm¹¹⁾。

混乱を避けるため、Cerensodnom-Taube の掲げる行文は斜体字で、これに対応するモンゴル語訳 AB の行文は正立字で表記する。トルファン出土本については、Cerensodnom-Taube の転写法を採用した。前者の中で [] 内は、Cerensodnom-Taube が補った箇所、日本語訳の中の [] 内はおおむねこの個所に当たる。明瞭に読み取れる箇所については太字とし、Cerensodnom-Taube の読みを忠実に再現した¹²⁾。



図 1

- (1) [...]*ysan* [...]*n-i* (あるいは-*W*) *I*[.....]
- (2) [...]*WB'Y :: burqan-u nomlaysan*
- (3) [...*bodist*]*v-ud-un qam[u]y jug-tür*
- (4) [...]*lgüngüi neret[ü] qorin tabudayar*
- (5) [...]*:: satu ::*

「(1)[...]した[.]のを[...](2)[...] *WB'Y*。私の語った(3)[...菩薩]のあらゆる方角において(4)[...]という名の25番目の(5)[...]。善哉。」

2行目の途中からが、おそらく仏典における「品」の末尾の定型文と考えられる。漢訳では、これに対応する個所は存在しない。また、モンゴル語訳のABの対応する個所は以下の通りで、この定型文に関してはABとトルファン出土本の相違が大きいことがわかる¹³⁾。

A čayan linqu-a neretü degedü nom-ača : ariy-a avalokiti isvari-yin qubilyan+i
üjegülügsen бүкүй-еңе egüden boluysan neretü qorin tabtayar jüil tegüsbe ::
: ::

B čayan lingqu-a neretü degedü nom-ača : aariy-a avalovakita šuvari-yin
qubilyan-i üjügülügsen бүкүй-еңе egüden-ü neretü qorin dötüger bölüg :: :
::

「白蓮という名の最勝経のうち、『観世音菩薩の変化を示した、四方に開いた門』という名の第25章が終わった。¹⁴⁾」

一方、そこまでの個所すなわち2行目の**WB'Y**までの部分はおそらく本文の末尾の部分に該当すると思われる。ABのそれは以下の通りである：

A deger-e ügei üneker toyoluysan bodi qutuy-tur sedkil egüskeldübei :

B deger-e ügei üneker toyoluysan bovadhi qutuy-tur sedkil egüskeldübei :

「無上の円満な菩提に発心したのであった。」

後出のText27を見れば判明する通り、トルファン出土本とABの行文の懸隔は大きい。したがって、ABを基にした安直な推定は控えるべきであろうが、筆者が見る限りではこの**WB'Y**は、egüskeldübei の末尾4文字に対応している。また文字《W》の上にかすかにではあるが読み取れるのは文字《D》の先端部に見える。したがって、この個所に関しては、Cerensodnom-Taube の読み[...]**WB'Y**:: は、[egüskel]dübei :: (「発した」) と改められるべきであろう。

この形式は、漢語では「発心する」に当たる術語の一部であるから、その直前にはさらに「心を」に相当する [sedkil] を補うことが可能となる。対格語尾の -i が接続した可能性もあるが、今は仮にABと同じと想定する。一行の長さが本来どれくらいであったのかは不明である。したがって、これが1行目に置かれていた可能性も排除できないが、今は仮に同じ行に配置しておく。

3行目末尾の **jug-tür** の後には、実は、かろうじてではあるが、文字の書き

出しの一部が読み取れる。鋭角的であり、2行目の *nomlaysan* の語頭にある《'》と酷似している印象を与える。《'》で始まり、しかもこの位置に来るのが文脈上不自然ではない形式は、現にABでもそうであるように、*egüden* 「門」である公算が高い。

4行目の *neret[ü]* は、正確には3行目と4行目の間に位置し、次に掲げる Text27 の12行目と13行目の間に書かれた漢字「品七」と同じく、明らかに後から付け加えられたものである。ともに、このふたつの断片の習作的な性格を物語っている可能性がある。

4行目末尾の *tabudayar* の後にも、3行目同様に、文字の書き出しの一部がわずかながらも見取れる。文脈的に見ても、また対応するABの行文に照らしても、ここに来るのは漢訳の「品」に相当する形式であると判断できる。ABを見ても、また他の仏典の例を鑑みても、それは *bölüg* もしくは *jüil* (後者については、3行目の *jug-tür* のひそみにならえば、ここでも注13) で記した字母が使用されていた可能性があり、そうだとすると *juil* と転写されるが、ここではとりあえず規範に即した形式とする) のいずれかであると想定してよい。前者の語頭に来る文字《B》は2行目の *burqan* の語頭にあり、後者の語頭に立つ文字《Y》は3行目の *jug* の語頭にも観察される。前者なら筆致は多少とも丸みを帯びるはずであるが、これが鋭角的であることは、前者ではなく後者であることを示唆している。

以上に基づき、筆者が提案する読み（1行目と5行目には変更がないので省略する）は以下の通りである：

(2) [*sedkil egüskeld*]übei :: *burqan-u nomlaysan*

(3) [... *bodist*]v-ud-un *qam*[u]y *jug-tür e*[güden]

(4) [...]*lgüngüi neretü qorin tabudayar* j[üil]

「(2) [発心]した。仏の語った(3) [...菩薩] のあらゆる方角において門(4) [...] という名の25番目の [章]。」

8. トルファン出土モンゴル語訳『法華経』写本断片その2

もう一方のText 27は、これよりは字数も行数も多い。といっても、ただか
20行で、しかも行頭から行末まで完全に残っている行は一行もない（図2、原
寸は29.1×19.2cm）¹⁵⁾。

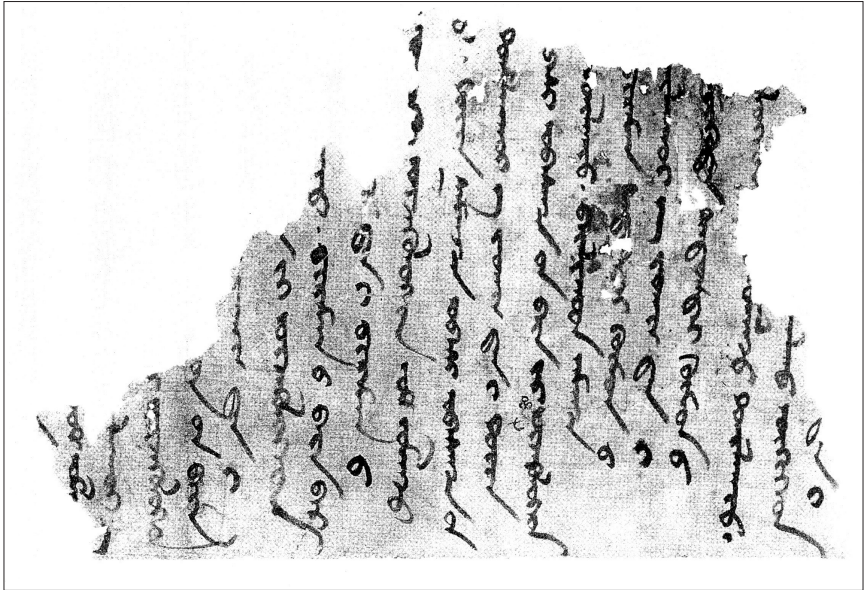


図2

先に述べた通り、「第25章」と明記されていることからわかる通り、これは究極的には漢訳に依拠している¹⁶⁾。先ほどの断片は章末であったが、この断片は終末部近くの本文であり、現存するAB（既に述べた通り、こちらはチベット語訳の重訳である）の行文と比較すると、そこには大きな違いが看取される。

この一節は対句が多用されてはいるが、詩頌ではなく散文である。したがって、むやみに行を改めるべきではないが、表示の都合上やむを得ず、一行毎に改行した上で、さらに意味の上で区切れるところで区切り、日本語訳を施すと

ともに該当する羅什訳の行文を示した。そのため、同一の行番号が繰り返されている部分があることに注意されたい。

- (1) [*bayaliyud-un beye-ber tonilyaquy-a joqis-dan-i*]
 (2) [*bayaliyud-un(?) beye-yi üjegülüged n]om noml[aju*
 (3) *tonilyayu]*

「[(1)長者の姿かたちをとって救済するのがふさわしいものたちには(2)長者の(?)姿かたちを見せて)説法し [(3)救済する….]」

「應以長者身。得度者。即現長者身。而爲説法。」

- (3) [*.....beye-ber tonil]yaquy-a*
 (4) [*joqis-dan-i... beye-yi]i üjegülüged*
 (5) [*nom nomlaju tonilyayu.*]

「[……姿かたちをとって] 救済するのが [(4)ふさわしいものたちには……姿かたち] を見せて [(5)説法し救済する。]」

「應以居士身。得度者。即現居士身。而爲説法。」

- (5) [*noya(?)]d-un beye-*
 (6) [*-ber tonilyaquy-a] joqis-dan-i*
 (7) [*noyad-un bey]e-yi üjegülüged*
 (8) [*nom nomlaju tonily]ayu*

「[(5)高官] の姿かたちをとって [(6)救済するのが] ふさわしいものたちには [(7)高官の姿かたち] を見せて [説法し救済] する。」

「應以宰官身。得度者。即現宰官身。而爲説法。」

- A čerig-ün noyan-iyar nomoʻadqaqui amitan бүкүн-дүр
 čerig-ün noyan-u bey-e-ber nom-i üjegülbei :
 B čirig-ün noyan-iyar nomoʻadqaqui amitan бүкүн-дүр

čirig-ün noyan-u bey-e-ber nom-i üjügülbei :

「將軍によって調御すべき衆生等には、
將軍の姿かたちによって法を示した。」

(8) *biraman-u bey-e-ber*

(9) [*tonilyaquy-a joq*]*is-dan-i biraman-u*

(10) [*beyeyi*] *üjegülüged nom nomlaju*

(11) [*tonilyay*]*u* .

「(8)婆羅門の姿かたちをとって [(9)救済するのが] ふさわしいものたちには、婆羅門の [(10)姿かたちを] 見せて説法し [(11)救済] する。」

「應以婆羅門身。得度者。即現婆羅門身。而爲説法。」

A *biraman-iyar nomoyadqaqui amitan bükün-dür*

biraman-u beye+ber nom-i üjegülbei :

B *biraman-iyar nomoyadqaqui amitan bükün-dür*

biraman-u beye+ber nom-i üjügülbei :

「婆羅門によって調御すべき衆生等には
婆羅門の姿かたちによって法を示した。」

(11) *toyin šamnanč ubasi ubasanč-un*

(12) [*beye-ber*] *tonolyaquy-a joqis-dan-i toyin*

(13) [*šamnanč u*]*basi ubasanč-un beye-yi üjegülüged*

(14) [*nom nomlaju*] *tonilyayyu* .

「(11)比丘や比丘尼、優婆塞や優婆夷の [(12)姿かたちをとって] 救済するの
がふさわしいものたちには比丘や [(13)比丘尼、優] 婆塞や優婆夷の姿か
ちを見せて [(14)説法し] 救済する。」

「應以比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷身。得度者。即現比丘。比丘尼。優
婆塞。優婆夷身。而爲説法。」

- (14) *bayaliyud šamnanč*
 (15) [...]*biraman qatuy-tai kümün-ü*
 (16) [*beye-ber to*]*niluyaquy-a joqis-dan-i*
 (17) [*bayaliyud(?) t*]*erigüten qatuy-tai kümün-ü*
 (18) [*beye-yi üjegül*]*üged [nom] nomlažu tonilyayu.*

〔(14)長者や比丘、……(15)婆羅門、婦女の [(16)姿かたちをとって救] 済する
 のがふさわしいものたちには [(17)長者等] 々で婦女の [(18)姿かたちを見せて
 説] 法し救済する。〕

「應以長者。居士。宰官。婆羅門婦女身。得度者。即現居士。宰官。婆羅
 門婦女身。而爲說法。」

- (19) [*jalayu niyud j*]*alayu ökiked-*
 (20) [*-ün beye-ber tonilyaquy-a joqis-]dan-i* [*jalayu niyud jalayu ökiked-ün beye-*
yi üjegülüged nom nomlažu tonilyayu ...]

〔[(19)童子や] 童女 [(20)の姿かたちをとって救済するのがふさわしい] も
 のたちには [童子や童女の姿かたちを見せて説法し救済する。]¹⁷⁾〕

「應以童男童女身。得度者。即現童男童女身。而爲說法。」

一見してわかる通り、モンゴル語訳のABに対応する箇所はたいへん少ない。

(1)～(3) (漢訳「應以長者身。得度者。即現長者身。而爲說法。」) と、(3)から
 (5) (漢訳「應以居士身。得度者。即現居士身。而爲說法。」) 及び(11)～(20) (漢訳
 「應以比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷身。得度者。即現比丘。比丘尼。優婆塞。
 優婆夷身。而爲說法。應以長者。居士。宰官。婆羅門婦女身。得度者。即現居
 士。宰官。婆羅門婦女身。而爲說法。應以童男童女身。得度者。即現童男童
 女身。而爲說法。」) に相当する部分は、トルファン出土本にはあるが、ABには存
 在しない。もちろん、チベット語訳にも欠けている。

また、漢訳ではこの後、「應以天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊
 那羅。摩睺羅迦。人非人等身。得度者。即皆現之。而爲說法。」と続くが、こ

れについてもトルファン出土本では対応する行文があるが、AB及びチベット語訳ではそれが存在しない。

以上に徴する限りでは、トルファン出土本は漢訳と平行しており、ABはチベット語訳と平行することは明らかである。もっとも、これはトルファン出土本が漢訳の重訳であることを意味するものではない。ウイグル語からの翻訳であると見るべきであろう。これについては別稿で論じる予定である¹⁸⁾。

トルファン出土文書の時代相は単一ではない。清朝時代の欽定版大蔵経（Text 98r, 98v）もあれば、17世紀半ばに西モンゴルで考案され使用され始めたトド文字による写本（Text 99, 100）もある。しかし、ここに掲げたものは、記された書体だけでなく行文中で使用されている特徴的な形式に照らしてみても、元朝時代の産物であることは疑問の余地はない。

正書法の面では、joqis-dan「ふさわしいものたち」における綴字 -qi- がそうである。これは17世紀以降の文献では払拭されすべて ki で統一されてしまう。語彙面では、šamnanč や ubasanč がそうである。モンゴル語では許容されない語末の二重子音をもち、しかもその末尾音が無声子音であるこれらの形式は、もとなつたウイグル語形そのままである。このままではモンゴル人には発音できない。後代、いや同時代においてすら、介入母音によって音節構造を変えた simnanča や ubasanča が使用される。モンゴル語文献の中でこれらのウイグル語形そのままの形式が使用されているのは、他に例がない。

以上のトルファン出土本については、稿を改めてさらに詳細に論じる所存であるが、元朝時代の産物であることは疑問の余地がない。それでは、同じく元朝時代に遡ると推定されるAの原典とトルファン出土本の関係はどのようなものなのか。これについては、次節で論じたい。

参考文献

- 河口慧海（2011）『梵蔵伝訳法華経』（河口慧海著作選集6）（1923年刊行河口慧海『梵蔵伝訳法華経』上・中・下（世界文庫刊行会）の合本・改訂版）
坂本幸男・岩本裕訳注（1964）『法華経』上・中・下、岩波文庫。（略称：岩本

訳)

高楠順二郎・渡邊海旭（1934）『大正新脩大藏經総目録』、大正新脩大藏經刊行会。（略称：大正）

樋口康一（1990）「『法華経』の蒙古語訳について」、『外国学研究』XXI、pp.109-136、神戸市外国語大学外国学研究所。

Cerensodnom, D. und Taube, M. (1993) *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung, Berliner Turfantexte XVI*, Akademie Verlag, Berlin.

Higuchi, Koichi (2012) “Unknown treasures hidden in lines of Mongolian Buddhist literature”, *Altai Hakpo (Journal of The Altaic Society of Korea)* 22, pp.139-154, The Altaic Society of Korea, Seoul.

Jäschke, H.A. (1881) *A Tibetan-English Dictionary*, Routledge & Kegan Paul, London and Henley. “

注

* 本研究は、平成22年度福武学術文化振興財団歴史学・地理学助成金（研究題目「モンゴル大藏経の本文批評を通じたモンゴル文献史・翻訳史及び仏教史の諸問題解明」：研究代表者 樋口康一）及び平成23・24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究題目「仏典モンゴル語に見られる言語接触を契機とする構造変化の研究」研究代表者 樋口康一）並びに平成23年度愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費（研究題目「漢語が周辺諸言語に与えた／与えつつある影響という視座からの日本語研究へのアプローチ」研究代表者 樋口康一）による研究成果の一部である。

1) このくだりは、他の論文等でもたびたび引用しているもので、ここでまた掲載することはお叱りを受けるかもしれないが、実は一部に修正を要する部分があったこと、そしてそれも含めて『法華経』のモンゴル語訳の性格を規定するにあたっては揺るがせにできない一節であること、この2点に鑑み、敢えて再掲することをお断りしたい。

2) Jäschke (1881) pp.237-8を参照。

3) Jäschke (1881) p.234を参照。

4) rkyal ka は Jäschke (1881) p.17、kyaal ka は同 p.6を参照。

5) Jäschke (1881) pp.108-109を参照。

6) Jäschke(1881)pp.363-364を参照。

7) 第3・4句については、いずれも、見間違いにしてもあまりにも低レベルでにはわかには措信しがたいが、今回本稿の執筆に際して改めて行文を精査しかねてからの疑念に確信を抱くに至ったものである。これまで放置してきた筆者の非才と怠慢を恥じなければならぬであろう。

8) 従前、筆者は非漢語圏の人名等はカタカナ表記せずローマ字化したものをそのまま掲げてきた。ひとつは参照の便を図るためである。もうひとつはどのようにカナ表記するか、一定の方針をたてることが、思うほか難しいからである。

筆者の引用するモンゴル語は、実際には縦書きの伝統的なモンゴル文字で表記されたものである。この文字で表記される文語にはいわゆる言文一致がなく、綴字と実際の発音は乖離している。では実際の発音で、となるところであるが、実際の発音と言っても、文書が作成された時期の読みを採るか、現在の現地音の読みを採るか、見解は様々である。チベット語の場合、事態はさらに複雑となる。モンゴル語より早く文字表記が始まり、綴字と発音の乖離が一層甚だしい上に、チベット人の読みを採用するのか、モンゴル人の読みを選ぶのかという問題も加わるからである。

実は、なかなか気づかないが、意外にもわれわれも同類の問題に直面してきたし、事実まだしている。漢字で表記された中国人や韓国人の人名をどう呼ぶか、などは、比較的わかりやすい。だが、問題はそれだけにとどまらない。筆者も含めてある一定の年齢以上の日本人にとってベトナムの「ユエ」という地名は、ダナンなどと並んでさかんに耳にした記憶があるはずである。ところが、昨今これをとんと耳にすることがなくなった。この、今や古戦場と称されることすら不思議ではないこの古都の地名はベトナム語の綴字では Hue と表記されるものであり、「ユエ」とは、これをフランス語式に語頭の H をとばして読む読み方のカタカナ表記に他ならないのである。

Peking であったものが Beijing と表記され、Bombay が Mumbai に改められ……、と地名に関しては現地音主義が主流となりつつある。

もっとも、地名のように今目前にあるものの呼称であれば、係争中の場所についてはさておき、現地音を定めるのは難しいことではない。ところが、歴史的な人名についてはどうか。「世界史」の教科書ではドイツ人やフランス人の人名も原則は英語式に読む……これが、筆者が高等学校で「世界史」を学んだ時代の原則であった。どうやらこれは今も踏襲されているらしいが、果たして妥当なのであろうか。

ただし、カナ表記には構造的な限界があり、ユエをフエと改めフレデリックをフリードリッヒと呼びなおしたとしても、現地音からの遠さが解消されるわけではない。また、正確さを追求するとなると、ローマ字転写せず、もとの文字表記そのものを掲げなければな

らないことになるが、一般向けの読み物のみならず、学術的な著述であっても、モンゴル語やチベット語についてそうすることに、果たしてどこまで意味があるのか。問題はつきない。

今回は思うところがあって、当の人物が存命していた当時のモンゴル人の読み（と推定できるもの）に基づきカナ表記を試みたが、さらに検討の余地がある。

- 9) 中期語では使用されない譲歩副動詞-*baču*の使用はその典型である。樋口(1990) pp.118-120、Higuchi(2012) pp.148-149を参照。
- 10) 羅什訳には対応する個所がない。岩本訳は「われわれもまた、この上ない完全な悟りに達するであろうという予言を得たいものだ。」河口訳では「世尊のこの智を考うるに、我等もまた無上完全円満の菩提に授記を得べしと思えり。」
- 11) Cerensodnom-Taube(1993) TAFEL VII.
- 12) モンゴル文字は縦書きし、行は左から右へと進むことに注意されたい。なお、大文字のアルファベットは文字転写ではなく翻字であることを示す。1文字多音価のモンゴル文字では、時にはその語形のみを見てもローマ字転写がひとつに決定できない場合があり、翻字はそれに対応する便法である。
- 13) 大文字で表記した箇所は、ローマ字転写が不可能と判断して翻字した箇所である。また、(3) の行末近くの *jüg* の母音は Cerensodnom-Taube では u の（上ではなく）下にウムラウトをつけた特殊な字母で転写されている。「方角」を意味するモンゴル語は *jüg* であり、母音調和があるモンゴル語では初頭音節の u と ü は異なる字形で表記する。ところが、中期語文献ではこの原則が守られていない事例が散見する。これに正確に対応するための転写法であるが、技術的な制約も顧慮してここではその字母を使用していないことをお断りしておく。
- 14) これはAに対する訳文である。Bは「白蓮という名の最勝経のうち、『観世音菩薩の変化を示した、四方に開いた門』という名の第24章。」で、形式上の細かな相違を別にすれば章名の大意は変わらないが、最後に掲げられた数字の相違に注意されたい。「25」が羅什訳と同じであり、一方、「24」がチベット語訳と同じであることは既に触れた通りである。
- 15) Cerensodnom-Taube(1993) TAFEL VI. なお、両断片とも裏面（なのか、どうかも定かではなく、むしろモンゴル語が書かれた方こそが裏だったのかもしれないが）には、漢文が記されており、内容は仏典であるが、何であるかは同定されていない。

なお、既に触れた通り、12行目と13行目の間に「品七」という漢字が記されている。Cerensodnom-Taubeは主として「品」に関わる議論を展開する（Cerensodnom-Taube(1993) p.110）が、筆者には正鵠を射ているとは思えない。「品」が、章より大きな単位を表すのに使用されるか否かが問題ではなく、「七」の方が注目に値すると考えるべきであろう。

3種ある漢訳のうちもっぱら本稿で参照している羅什訳『妙法蓮華經』（大正262）だけではなく闍那崛多訳『添品妙法蓮華經』（大正264）も全7巻（筈法護訳『正法華經』（大正263）のみは10巻から成る）から成るが、今問題としている「觀世音菩薩普門品」は第7巻に含まれていることは、単なる暗合ではない。ただ、この位置に記されているのはいかにも面妖であり、先にも触れた通り、この断片が習作的性格を有するものであることを示唆していると思われる。

- 16) 究極的にと記したのは、当時の状況を考慮すると、モンゴル語版は直接漢訳を翻訳したのではなく、それに基づくウイグル語版（ただし、これも漢訳を直接翻訳したとは限らないが）に依拠していると推定できるからである。後出参照。
- 17) 以上のうち、サンスクリット本とチベット語訳には(5)~(10)しかないが、それに対する岩本訳は「彼は、將軍によって導きえられる者たちには、將軍の姿で教えを説く。彼は、婆羅門によって導きえられる者たちには、婆羅門の姿で教えを説く。」、河口訳は「將軍に依って度すべき衆生等には、將軍身を以て法を示せり。婆羅門に依って度すべき衆生等には、婆羅門身を以て法を示せり。』
- 18) それにしても、鮮明に読み取れる部分の少なさに驚かれる向きも多いかもしれない。実際、語頭から語末まで欠けるところがない形式は30あまりにすぎない。とはいえ、対応するのが「觀世音菩薩普門品」であることは明らかであるし、該当箇所は詩頌ではないが漢訳を見ればわかる通りで対句表現が多用されており、しかも幸運なことに実体的な意味を持つ形式は多くが行文中のどこかにあるから、これを手がかりにすれば、行の長さを勘案しながら埋めるにふさわしい形式を想定するのは、種々の手立てが揃った今日であれば、それほど難しいことではない。

それでも手が着けられなかったのが、(3)~(5)の [] 内である。漢訳の「居士」を復元するのは躊躇されたのであろう。もう一箇所「居士」に対応する形式が使用されているのが、(14)~(18)の一節であるが、想定できる *šamanč* と「居士」は必ずしも平行しない。そもそも、この一節は漢訳に比べて特に後半部が簡略化されている。この点では、実は、トルファンから出土したウイグル語訳『觀音經』と平行しているのである。Cerensodnom-Taube(1993)pp.108-111を参照。

また、第19~20行目の読みはいささか強引とも言える。語頭から語末まで欠けることなく存在するのは *ökiked* 「娘たち」一語である。それ以外の部分に対応する漢訳とウイグル語訳『觀音經』の対応する箇所にある形式からの推定に他ならない。Cerensodnom-Taube(1993)pp.111-112を参照。